

(1) 教育実習から学んだこと 〈3〉

「アクション」を取り入れた生徒主体の授業（高校 日本史）

法学部 4年 O.M

◇生徒主体の授業を目標に

これまでの教職課程の講義において、「生徒主体の授業」が理想の授業の1つとしてしばしば掲げられてきた。自らの中学校・高校時代を振り返ってみると、もともと勉強は嫌いではないので延々と先生の話聞いて板書をノートに写すようなスタイルの授業であっても寝てしまうほど退屈だとは思わなかった。しかし自分が授業に参加していると実感できるような授業のほうが魅力的なのは確かである。

しかしながら一般的に暗記科目と言われ知識を教えることがメインの社会科で、生徒が主役となる授業を行うことは他教科と比べるとなかなか良いアイデアを思いつくのは難しいことではないだろうか。例えば英語や国語といった言語を扱う教科であれば、音読など声を出す動作で生徒のアクションが期待できる。一方、数学や生物・化学などの教科ならば、証明や実験などの手を動かし思考するという作業を通じて公式や事象の理解を図れる。ところが社会科の教科ではこのような動作を生徒に要求することはほとんどない。せいぜい教科書を音読してもらうくらいである。しかしだからといって、教える側が一方的に話すのでは生徒の意欲は盛んになりにくいのは確かだろう。このように私は考え、「生徒主体の授業を実践する」ということを教育実習中の目標の1つとした。

◇生徒の「アクション」を増やす試み

この目標に取り組むにあたり、「生徒のアク

ションの種類または回数を増やす」ということを意識した。様々な動作を授業のなかで生徒に積極的に行ってもらうことで、生徒主体の授業を展開できるのではないかと考えた。

これらのアクションを盛り込むために、私は以下に述べるような授業を行った。まず、授業はプリントを使用し、書き込んでもらう形式を採った。これにより、生徒は教師の話「聞く」そしてポイントを「書く」というアクションを取ることができる。また、生徒自身が必要だと感じたことや印象に残ったことを判断して書き残せるよう、プリントを区切って空白をつくり、メモ欄とした。このメモ欄は生徒からも好評であった。

次に、「読む」「話す」というアクションをしてもらうために史料の音読を採り入れた。実習で担当した単元が明治初期だったので、徴兵令や地租改正など重要な法令が多くあった。これらの条文を指名した生徒に読んでもらい、その後解説を加えた。

「見る」アクションについては図説を積極的に利用した。四民平等について扱った時にはグラフで身分別の人口構成を確認したり、文明開化では当時の様子を描いた絵を見たりして、視覚的にその時代をとらえられるよう心掛けた。実物を見せられるとより良いと思う。

また、多くの生徒に「話す」機会ができるような様々な質問をした。発問する際注意したことは、これまでの復習であったり自分の感想やイメージについて述べたりというように、生徒が答えやすい質問をするということである。これによって授業のテンポが良くなり、

生徒が臆せず発言できる雰囲気づくりに効果があるため、それを意識した。

そして、生徒に行ってほしいアクションのなかで最も難しかったのは「考える」という動作である。社会科では知識を生徒に教えるという段階に留まりがちであり、数学のように教えられた知識すなわち公式を使って実際に問題を解くというステップまでスムーズに進みにくい。ここでは思い出すということに近いが「考える」という作業には、ご指導いただいた先生が導入されていた小テストが役立った。小テストの実施により生徒のアクションが増えただけでなく、授業の最初に行うことで授業と休み時間に境界をはっきり生まれ、適度な緊張感ができた。

こういった要素を散りばめて教壇実習を行った結果、まず感じたことは「授業は生徒と教師でつくりあげるものだ」ということである。授業における教師の役割とは、生徒が知識を獲得するための枠組みをつくり、その枠組みのなかに生徒が知識を順序立てて整理できるように手助けをすることだと私は考えた。教師が道すじを示しながらも、生徒が実際にその道を一步ずつ歩んでいけることが「生徒主体の授業」といえるのではないだろうか。

また、「準備の重要性」を教壇実習を経て痛切に感じた。先ほど述べた授業の枠組みづくりには事前の準備が欠かせない。それだけでなく、生徒からのリアクションに応えるためにも入念な準備が必要である。生徒に多くの質問を投げかけるということは、それと同数の生徒からの反応があるということであり、そのなかには想定内のものもあればそうでないものもあるだろう。教師がそれにフォローやレスポンスを返すことで、授業の枠組みの幅は広げられる。そのためにも準備は重要である。

◇考えさせる仕組みを組み込むこと

今回の教育実習においては、基本的にこの

ようなスタイルで「生徒主体の授業」を目指し、その結果様々な気づきを得たが一方で課題も多くあった。その1つが「考える」という生徒のアクションにおいて、知識を獲得する段階で生徒が「考えられる」授業にすべきではないかということである。これは現段階では良いアイデアを思いつけなかった。だが、教科の先生の授業を見学した際にヒントを得られた。地租改正後に地主はなぜ財産を拡大することができたのかという問いを生徒に投げかけ、米価の季節による変動をヒントとして挙げ、米価の高い時期に余剰の米を現金に換えることで地主は利益を得ていたという答えを導いていた。ここでは1つの知識を生徒自身の思考活動によって肉付けして獲得させることができている、こういった形で「考えさせる」アクションをつくれたらと思う。また、生徒が平等に、かつ数多くアクションを行えるように生徒の指名の方法を工夫することも大切だと感じた。

このように、授業において様々な場面で生徒の多様なアクションを図ることによって、授業の枠組みの幅と奥行きが増し、「生徒主体の授業」が行えるのではないかと考えている。